ちょっとそこまで ～お散歩日和（植物編）～

ドウダンツツジ

団地内のあちこちでドウダンツツジが真っ赤に紅葉しています。

ところで、次の漢字は漢検１級の出題範囲に含まれる「足偏の漢字一覧」です。この中でいくつの漢字が読めますか？そして、いくつの漢字を書けますか？　恥ずかしながら、私自身はほとんどお手上げ状態です。

> 跂・趺・趾・跏・跖・跌・跚・跛・跋・跟・跣・跪・跫・跼・跿・踉・踝・踟・踞・蹂
> 踵・踰・踴・蹊・蹉・蹌・蹇・蹐・蹈・蹙・蹠・蹣・蹤・蹕・蹶・蹲・蹼・躅・躙・躁
> 躇・躋・躊・躓・躑・躡・躙・躡・躔・躄・躱・躍・躋

では、この中の２文字を組み合わせた次の熟語はいかがでしょうか。「蹂躙」「躊躇」「蹲踞」「蹉跌」…と続きます。「じゅうりん」「ちゅうちょ」「そんきょ」「さてつ」…となりますので、何となく見覚えがあります。それにしてもどうして足偏の漢字にはこういう難しいものが多いのでしょうか。

「躑躅」はいかがでしょう。「てきちょく」と読み、「足踏みすること。ためらうこと。」という意味です。が、もう１つ別な読み方があります。正解は「ツツジ」です。「見る人が足を止めるほど美しい」ことに由来すると言われていますが、どうも嘘っぽいので調べてみました。

５～６世紀の中国の学者陶弘景（とうこうけい）が、「羊躑躅（ようてきちょく）」という植物について、「羊がその葉っぱを食べると、躑躅して死んでしまう」と述べています。この羊躑躅という植物は、山地に自生するオレンジ色のレンゲツツジのことで、確かに、毒を含んでいることが広く知られています。

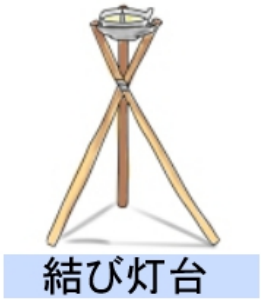
突然思い出しましたが、子供の頃ツツジの花を摘み、その根元に口を近付けて蜜を吸うのが流行っていました。無知とは恐ろしいものです。まあ、オオムラサキツツジを始め多くのツツジには毒はないそうですが、調子に乗って次々と遊んでいたら、それとは知らずレンゲツツジに…ということもありそうです。

ついでに言うと、後述する「馬酔木（アセビ）」にも毒があり、馬がその葉を食べるとその毒性から酔ったように足が萎えることから「足癈（あしじひ）」と呼ばれ、変化して「アセビ」、漢字では「馬酔木」の由来になっているのだそうです。

さて、今回ご紹介する「ドウダンツツジ」は、ツツジとはその姿形が大きく異なるために区別して、短く「ドウダン」と呼ぶことも多いです。

まず気になるのは「ドウダン」とは何かということですが、「トウダイ（灯台）」が訛ったものとされます。その理由は、枝分かれの仕方が古い時代に宮中行事で用いられた「結び灯台」に似ているからと言われています。漢字で「灯台躑躅」の字が当てらているのはそういう理由からです。

ご存知の方は多いと思いますが、「灯台下暗し」の「灯台」は、海の灯台ではなく、部屋の灯りとして使われたこちらの灯台、いわゆる「灯明台」です。油皿の上に火を灯すため、皿の下にあたる場所は影になって見えないという意味です。



ドウダンツツジの花は春先に咲きます。小さな釣鐘が大きな特徴ですが、似たような形状の植物をここに並べてみます。区別がつきますか？

一つ一つは小さく可憐な花ですが、春の開花期にはそれが株一面を真っ白に覆い尽くします。その様子が満天の星を連想させ、「満点星」という素敵な漢字表記もあります。さらに、これには次のような伝説もあると言います。

道教の神である太上老君（たいじょうろうくん:老子を神格化した存在）が薬を練っていた時に、傍らの玉盤にあった霊水をうっかりこぼしてしまいます。すると、この水が飛び散り、その先にあったドウダンツツジの枝先へと広がって壺状の珠になり、それがまるで満天の星のように輝いて見えたのだそうです。

「満天星」とは縁起の良い名前です。もっと広まっても良い名称でしょう。

最後に、少し違った角度から花の姿を紹介します。花冠の先は５つに裂け、中にめしべが中央に立ち、その周囲に１０本のおしべが恥ずかしそうにのぞいています。アンティークなシャンデアリアを思わせる気品を感じさせるではありませんか。

（終）